

京都大学	博士(文学)	氏名	諫 早 直 人
論文題目	古代東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究		
(論文内容の要旨) 本学位請求論文は、ユーラシア北方草原地帯で成立し、世界中に広がっていったと考えられる騎馬文化が、東北アジア各地（中国東北部、朝鮮半島、日本列島中央部）に拡散していく過程を、馬具などの考古資料に対する分析を通じて明らかにし、当該地域における騎馬文化拡散の歴史的意義を論ずることを目的とする。 紀元後4～5世紀頃に起こったこの騎馬文化東漸現象をめぐっては、およそ半世紀前に江上波夫によって「騎馬民族征服王朝説」（以下、「騎馬民族説」）が提示されて以来、多くの議論が積み重ねられてきた。しかし、それらは「騎馬民族説」に賛成するにせよ、反対するにせよ、受容する側の地域における受容以前の社会・文化との断絶性もしくは連続性を強調するか、受容地域とユーラシア北方草原地帯の‘本来’の騎馬文化を比較し、その類似性もしくは非類似性を強調するにとどまり、当該期の東北アジア各地にどのような騎馬文化が存在し、それらが相互にどのような関係性をもって展開していったのか、という実証的議論にまでは発展しなかった。また「騎馬民族説」に対する批判の多くが、批判のための批判にとどまり、「民族移動」に代わる騎馬文化伝播モデルを提示するには至らなかった。 そこで本論文では、日本列島はもちろん、中国東北部や朝鮮半島において近年増加している馬具を中心とする考古資料に立脚して、各地域の騎馬文化の実体を明らかにし、それらを相互に比較していくことによって、他地域とは区別される独特の装飾騎馬文化を共有する東北アジア各地の共通性と差異性を浮き彫りにした。さらには騎馬文化の拡散という現象を、それぞれの地域における古代国家形成の動きの中で捉えなおし、移住や征服などによって説明する「騎馬民族説」とは異なる新たな騎馬文化伝播モデルの提示を試みた。具体的には以下のような手順で議論を進めていった。 まず第Ⅰ部では、東北アジアの広範な地域から出土した馬具を同じ時間軸の中で議論していくための年代的枠組みを確立した。第1章では、東北アジアの中心に位置し、かつ東北アジアの中でも当該期の資料が最も豊富に出土している朝鮮半島南部三国時代の鉄製轡製作技術について検討をおこない、轡を構成する諸属性に対する属性分析、および鐙との共伴関係に対する検討を通じて、そのおおよそその変遷を明らかにした。第2章では前章で検討した鉄製轡の変遷観と鐙に対する既存の編年的研究の成果をもとに、中国東北部～朝鮮半島北部、すなわち三燕・高句麗地域における馬具の相対編年を組んだ上で、併行関係を設定し、紀年墓出土資料などの年代決定資料をもとに、おおよその製作年代を付与した。また朝鮮半島南部諸国の中でもとりわけ兩地域の馬			

具との強い関係性を示す新羅地域出土馬具との併行関係を設定することによって、年代決定資料の乏しい新羅地域の馬具にもおおよその製作年代を付与した。さらには技術の伝播に時間差が認められないのに対して、各地域における装飾馬具セットの生産開始時期には顕著な時間差が認められることを明らかにし、その背景に活発な地域間交流とともに製作主体である各王権の政治的意図が強く反映されている可能性を指摘した。第3章では朝鮮半島南部各地および日本列島の馬具の相対編年を組み、中国東北地方～朝鮮半島北部の馬具編年との併行関係を設定し、前章でえられた製作年代をこれらの地域の馬具にも付与した。あわせて中国東北部の年代決定資料にもとづく本書の年代観と、各地域のほかの年代決定資料、とりわけ理化学的年代決定法との対応関係について言及をおこなった。これら第Ⅰ部の作業を通じて、東北アジア各地から出土した馬具を同一基準の暦年代のもとに、比較していくことが可能となった。

第Ⅱ部では朝鮮半島南部における騎馬文化の受容について検討をおこなった。第4章ではまず、鐙・鞍を伴う騎馬文化が出現する以前、すなわち原三国時代の轡製作技術を明らかにし、三国時代の轡製作技術との類似点と差異点を抽出した。あわせて周辺地域の轡製作技術との比較をおこない、原三国時代馬具の系譜についても考察を加えた。第5章では朝鮮半島南部三国時代に出現する騎馬文化の有力な系譜地の一つと考えられている夫余地域の轡製作技術を明らかにし、朝鮮半島南部の初期の轡製作技術との比較をおこなった。まず夫余地域の老河深遺跡出土轡の銜製作技法を明らかにし、それが朝鮮半島南部では基本的に確認されないのに対して、匈奴を中心とする中国北方に広く分布することを明らかにした。その上で轡製作技術においては、朝鮮半島南部、特に洛東江下流域と夫余地域との直接的な関係は想定しがたいことを論じた。第6章では前章に引き続き、朝鮮半島南部における騎馬文化の出現を示す有力な考古資料の一つとして注目されてきた「鍔」と呼ばれる金属製煮沸具に焦点をあて、朝鮮半島南部における騎馬文化の導入について検討をおこなった。まず各地で「鍔」とされてきた容器について検討をおこない、それらを形態や用途にの違いにもとづいて分類した。その上で、騎馬遊牧民に特徴的な煮沸具であったと考えられる北方式鍔について検討をおこない、朝鮮半島南部、特に洛東江下流域から出土するそれらが「騎馬民族」の移住を示す根拠とはなりえないことを論じた。

第Ⅲ部では朝鮮半島南部における騎馬文化の展開について地域ごとに検討をおこなった。とりわけ東北アジアの騎馬文化の特徴である装飾馬具に注目し、各地域で独自の装飾馬具生産が展開していく様相を追究した。まず第7章では、洛東江下流域の金官加耶地域に騎馬文化が最初に導入され、そこから一元的に朝鮮半島南部各地や日本列島へと拡散していったとみる考えに対して批判的検討を加えた。その基礎作業として金海地域と釜山地域でそれぞれ編年を組み、相互の共通点と差異点を明らかにした。その上で、釜山地域の馬具にある時期以降、金海地域よりも洛東江以東地方の馬具との共通性が強くみられるようになることを指摘し、その背景に新羅の洛東江河口進出

が深く関わっていたことを論じた。また金官加耶地域には新羅や大加耶などの周辺地域でみられるような独自の装飾馬具セットが成立しなかったことを確認した。第8章では洛東江以東地方、すなわち新羅地域における馬具生産の展開とその特質について検討をおこなった。具体的にはまず、新羅王権が一貫して都をおいた慶州地域の馬具編年を組み、その上で洛東江以東地方各地の中でも比較的早くに新羅に組み込まれたと考えられ、長期間にわたって豊富な量の馬具が出土している慶山地域との比較をおこない、両者の共通性を確認することによって、洛東江以東地方から出土する馬具を新羅のもとで解釈するための基盤を整えた。その上で新羅地域における装飾馬具生産の成立とその後の展開について通時的検討をおこない、5世紀前葉から中葉にかけて出現する装飾馬具に慶州の王陵級積石木槨墳出土馬具を頂点とするピラミッド構造の序列が存在したことを明らかにし、それが新羅の「脱高句麗化」の一環の過程で着装型金工品（服飾）生産と一体で進められたであろうことを論じた。第9章では洛東江以西地方の中でも、大加耶地域における装飾馬具生産の開始とその後の展開について検討をおこなった。まず陝川玉田古墳群を中心に進められてきた既存の大加耶馬具研究の問題点を指摘し、高霊池山洞古墳群を基軸にした大加耶馬具編年の再構築を試みた。その上で大加耶を取り巻く歴史的状況を考慮しつつ、各時期における馬具生産の変遷を概観し、新羅地域と百済地域の馬具製作技術の影響を強く受けながらも5世紀後葉には各種着装型金工品の製作技術を集約することによって大加耶独自の装飾馬具セットが成立することを明らかにした。第10章では中西部を中心とする百済地域の馬具編年を組み、馬具生産の展開とその特質について検討をおこなった。その結果、百済地域では鑣轡などの実用性の高い馬具は盛行するのに対して、装飾馬具がほとんど出土せず、また新羅や大加耶のように着装型金工品と一体で製作された形跡も確認できないことを明らかにした。

第IV部では日本列島における騎馬文化の受容と展開について検討をおこなった。まず第11章では、日本列島における最古の馬具（鑣轡）とみる見解と、馬具ではなく鑷子状鉄製品とみる見解が対峙する老司古墳出土品について検討をおこなった。銜と考えられてきた振り金具の製作技法に銜製作技法との共通性が認められながらも、各種部品の組み合わせが轡にはみられない組み合わせであることを明らかにし、それが轡ではなく鑷子状鉄製品であることを明らかにした。第12章では日本列島における初期の轡である鏡板轡、環板轡、鑣轡の製作技術について検討を加え、朝鮮半島南部との併行関係などにもとづいて、編年を組んだ。さらにはその年代や系譜について検討をおこない、大部分の初期馬具の系譜が直接的には朝鮮半島南部に求められるものの、その輸入経路は従来考えられてきたよりも多様であることを指摘した。あわせて倭王権と特定の国との一元的な関係にもとづいて、すべての初期馬具を合理的に説明することは困難であることを説いた。第13章では日本列島と朝鮮半島南部で最古の鉄製輪鐙とされる資料の製作技法を詳細に検討し、それらの形態が木心鉄板張輪鐙に由来す

ること、さらにはそのような木心輪鍔系から非木心輪鍔系へと鉄製輪鍔の形態が変遷していくことを明らかにした。また、中国など周辺諸地域から出土した資料との比較をおこない、東アジアにおける鉄製輪鍔の出現について考察を加えた。第14章では日本列島における騎馬文化の受容と拡散について検討をおこなった。まず各種初期馬具をセットとして把握し、それらを構成する個々の馬具の系譜に対する検討を通じて、それらのセット（馬装）としての系譜を明らかにした。さらには、それらの馬具とともに日本列島にもたらされたであろう馬匹の供給元についても推測をおこなった。次に、日本列島における馬具生産の開始時期について検討を加え、補修品などの存在から日本列島で馬飼育が始まる過程で、馬具生産も開始していたであろうことを指摘した。さらには、東北アジア諸地域の馬具と密接な関係を有しながらも現状では特定地域に系譜を限定することのできない装飾馬具セットの中に、眉庇付冑など日本列島で製作されたと考えられる金銅製品と同じ意匠をもつものが含まれていることを明らかにし、5世紀前葉～中葉には多様な系譜をもつ渡来系工人が王権のもとに集約されることによって、倭独自の装飾馬具生産が開始していたと考えた。

終章ではこれまでの議論を総括し、東北アジアにおける騎馬文化東漸の歴史的意義を論じた。具体的にはまず東北アジアの騎馬文化の特徴ともいえる装飾騎馬文化が三燕地域で成立する過程を探り、それが騎馬遊牧民である慕容鮮卑に固有のものではなく、前燕建国前後に慕容鮮卑が中国の官位制度や鹵簿制度といった諸制度を導入する過程で、安定した身分秩序の構築を目指した前燕王権によって、服飾と一体で整備された身分表象システムの一環であったことを明らかにした。またそのような独自の装飾馬具セットの成立が、胡族である前燕王権がみずからを中国正統王朝と位置づける「中華」意識や「天下」観の形成と密接に関わり、それをビジュアルに表現する装置であったことを論じた。次に高句麗地域にこの装飾騎馬文化が受容される過程を追究し、それが故国原王代の前燕との戦争関係やその後の従属関係の中ではなく、「上下序列的な秩序体系に整備された十三等構造の官位制」が成立したとされ、高句麗が飛躍的に発展する広開土王代に整備されていくこと、そしてそれが三燕地域の装飾騎馬文化をそのままではなく、適宜取捨選択やアレンジを加え、独自の装飾馬装を創出していたことを明らかにした。次いで、朝鮮半島南部各国における装飾騎馬文化の受容過程について整理をおこなった。まず新羅地域において、高句麗との従属的關係から離脱する過程で始まったと考えられる着装型金工品（服飾）と一体となった装飾馬具による身分表象が、中原高句麗碑にみられる服飾下賜記事から本来は高句麗地域にも存在し、それを体系的に受容しつつも、独自の形・意匠・素材の装飾馬具を創出することで、王を頂点とする独自の身分表象システムを構築したことを明らかにした。また、新羅地域に若干遅れて着装型金工品と一体となった装飾馬具生産のおこなわれた大加耶地域では、隣接する新羅地域における独自の装飾馬装の創出に刺激を受け、新羅地域からの強い技術的影響を受けつつも、新羅とはまったく異なる形態の馬具をベー

スに採用することによって、独自の装飾馬装を創出したことを確認した。これに対し、百済地域においては着装型金工品と一体で装飾馬具生産がおこなわれた形跡を確認することができなかったが、その理由として高句麗との恒常的敵対関係と中国南朝との密接な朝貢関係があったことを説いた。最後に倭に視点を移し、従来考えられてきたよりも早くから、独自の装飾馬具生産が開始していたと考えられること、その背景に「倭の五王」による中国南朝への遣使に象徴される倭王権じたいの伸長があったことを論じた。

このように各地における騎馬文化の実体は様々であり、決して一様ではない。また各地における馬具生産の画期が、それぞれの王権における画期とおおむね一致することをふまえば、かつて「騎馬民族」移動の考古学的証拠とみなされた東北アジアにおける騎馬文化の伝播は、東アジア世界全体の混乱に伴う各国間の競合関係のもとで、馬やそれに関わるあらゆる人・モノ・情報に対して、各王権が主体的にアクセスし、それを各地域社会に普及・定着させることによって起こったと考えられる。そのような点において東北アジアにおける騎馬文化の拡散は第一義的には軍事利用を目的とするものであっただろうが、それに加えて前燕で成立した服飾と飾馬が一体となった身分表象システムが、時間差をもちながら、そしてその内容を大きく変容させながらも玉突き現象のように東へ伝わっていくことによって、東北アジア独特の装飾騎馬文化が形成されていった。それは、各王権による独自の世界秩序の形成とも密接な関係を持ち、装飾馬具をつけた飾馬は王を頂点とする序列をビジュアルに表現する装置であったと考えられる。このように各王権の主体的導入によってなされた騎馬文化の東漸は、東北アジアの一体化とそれぞれの地域における独自の国家の形成という一見矛盾した動きを同時に加速化させていく契機となった。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ユーラシア北方草原地帯で成立した騎馬文化が、東北アジア各地（中国東北部、朝鮮半島、日本列島中央部）に拡散していく過程を、馬具を中心とする考古資料の分析を通して明らかにし、その歴史的意義を論ずることを目的としている。第Ⅰ部（第1～3章）では、東北アジア各地から出土した馬具を同一基準の暦年代で比較するために、鉄製轡の製作技術に対する検討を手がかりとして、中国東北地方から日本列島にいたるまでの馬具の広域編年を作成した。その上で、第Ⅱ部（第4～6章）と第Ⅲ部（第7～10章）では、朝鮮半島南部における騎馬文化の受容および展開過程について、第Ⅳ部（第11～14章）では、日本列島における騎馬文化の受容と展開過程について検討をおこない、終章において騎馬文化の東漸とその歴史的意義をまとめている。

本論文を作成するために、論者は日本のみならず大韓民国各地から出土した馬具を可能な限り実見・実測し、製作技術の詳細な検討を続けてきた。その結果、これまで個別的に存在は知られていたが実態が明らかではなかった、高度の鍛造技術を用いずに轡を製作する技術である、「3条振り技法」や「無振り技法a類」の存在を認識する方法を確立し、その時空的広がりを明らかにすることができた。このように、地道な調査活動の積み重ねによって導きだされた馬具製作技術に関する新たな知見が、本論文における議論の展開の大きな支えとなっている。

中国東北地方から日本列島までにいたる馬具の広域編年を作成したことも、本論文の大きな成果の1つである。論者は、鐙に注目した従来の編年案に自らの轡の変遷案を組み合わせることにより、より安定した広域編年案を提示することができた。この広域編年案は、4～7世紀における東北アジア各地における年代決定の基準として、馬具研究者のみならず、朝鮮三国時代や日本の古墳時代を専攻する多くの研究者によって参照されることが期待される。

こうした基礎作業をもとに、論者は、多様な馬具資料が出土している朝鮮半島南部における騎馬文化の受容および展開過程について、新たな見解を提示した。中でも重要なのは、朝鮮半島の東南端にあたる洛東江下流域における馬具の受容と変遷を検討した第3～7章の議論である。この地域からは、1990年代の調査により朝鮮半島南部における初期段階の馬具が集中的にみつき、3世紀末に中国東北地方の扶余族の一派が洛東江下流域に移動して金官加耶国が成立したという、一種の騎馬民族征服王朝説の重要な証拠とされてきた。それに対して論者は、轡の製作技術の違いや、煮沸具である鍔の受容様相からみて、これらの考古資料が扶余族の移動を示す証拠にはなりえないことを立証した。また、金官加耶国から加耶の諸地域や新羅、さらには百済や倭にまで騎馬文化が広がったという仮説も成立しえないことを主張した。

技術的な変化を手がかりとして、洛東江以東地方・以西地方と朝鮮半島中西部における馬具生産の受容・展開様相を検討した第8～10章では、金や銀で装飾された馬具

類の受容と生産・使用のあり方が、それぞれの地域の特徴をよく示していることを明らかにした。これまでの研究のように、新羅・百済・加耶諸国の存在を前提とするのではなく、馬具自体の変遷に基づいて、新たな地域間関係や地域の特色を提示することができた点は、高く評価できる。

以上のような朝鮮半島南部における騎馬文化の様相の新たな理解をもとに、日本列島における騎馬文化の受容と展開についての検討をおこなった第IV部では、日本列島における初期馬具の系譜と、その出現の契機が、従来言われてきたような特定の地域との一元的な関係に基づいて説明できるものではないことを明らかにした。また、馬具の組み合わせと系譜の違いを手がかりとして、多様な系譜をもつ渡来系工人が王権のもとに集約されることにより、5世紀に倭独自の装飾馬具生産が開始された可能性を指摘したことは、当時の王権を考える上で重要な問題提起である。

本論文で示された馬具の生産と使用をめぐる諸様相と、それを通して推定される地域間関係の理解には、「騎馬民族征服王朝説」をはじめとする既往の学説に対して、大幅な見直しを迫っている部分が少なくない。今後、日本および韓国の少なからずの研究者から受けることになるであろうさまざまな批判に応じ、議論を深めていくためには、論者は、馬具をはじめとする騎馬文化の研究にとどまるのではなく、東北アジア各地における文化の特性と地域間関係を総合的に理解する研究を進めねばならないだろう。しかし、本論文が、そうした新たな研究を進めていくための重要な基礎作業としての役割を果たしうると考える。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月16日、調査委員3名が、論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。